

■ 提 言 ■

横浜から未来を変える —小児感染症学の新たな地平へ—

森 雅 亮

第 58 回日本小児感染症学会総会・学術集会 会長

東京科学大学生涯免疫医療実装講座／聖マリアンナ医科大学リウマチ・膠原病・アレルギー内科

第 58 回日本小児感染症学会総会・学術集会を、2026 年 10 月 24（土）～25（日）日にパシフィコ横浜ノースで開催させていただく運びとなった。本学術集会のテーマは「横浜で変えよう、自分と未来。～No Patience, No Fruit～」としたが、これは野口英世博士の言葉「忍耐は苦し、しかれどもその実は甘し」、そして「変えられるものが二つある、それは自分と未来だ」に由来したものである。

2026 年は、野口英世博士生誕 150 年という節目の年にあたる。博士は横浜海港検疫所において、日本初のペスト患者を発見・隔離するという重要な功績を挙げ、その後国際的な研究活動へと飛躍された。この横浜の地は、まさに感染症との最前線であり続けてきた場所であると同時に、新たな知と挑戦が生まれる出発点でもあったのである。

私自身、これまで横浜に残る旧細菌検査室を訪れた際、100 年以上の時を超えて、未知の感染症と対峙した先人の息遣いを強く感じた。COVID-19 のパンデミックを経験した現代においても、感染症は依然として社会の構造を変えうる存在であり、その対応には科学的知見とともに、粘り強い努力と挑戦が不可欠であることを改めて認識させられた。

本学会はこれまで、「感染症」と「免疫」という二つの学問領域を融合させながら発展してきた。われわれが日常診療で直面する感染症の病態は、病原体のみならず宿主の免疫応答に大きく依存しており、この両者を俯瞰する視点こそが本学会の独自性であり強みである。免疫不全、膠原病、自己炎症性疾患、川崎病などの領域においても、その境界はますます曖昧となり、学際的理解の重要性は一層高まっている。

さらに現在、小児感染症学は新たな転換点にある。新興・再興感染症への対応、抗菌薬適正使用、ワクチン政策、国際連携など、われわれに求められる役割は拡大している。同時に、地域医療を担う臨床医、専門施設、研究者、さらには多職種が連携し、エビデンスを創出し共有する体制の構築が不可欠である。本学術集会では、こうした多様な視点を統合し、「実臨床に還元できる

知」を共有する場としたいと考えている。

また、本学会の今後を見据えたとき、若手医師の育成、多様性の確保、国際的ネットワークの強化は重要な課題である。学会は単なる知識共有の場ではなく、次世代が挑戦し、成長するための基盤でなければならない。子どもたちの未来を守るという共通の使命のもと、世代や立場を超えて学び合う「開かれた学会」の実現が求められている。

本学術集会終了後に開催するICD講習会では、水際対策や検疫といった感染症対策の原点にも改めて目を向ける予定なので、お時間に余裕がある方はぜひご参加いただきたい。

感染症との闘いは、決して一過性のものではなく、不断の努力と忍耐の積み重ねによって支えられている。野口英世博士が示したように、「変えられるものは自分と未来」である。本学術集会が、参加者一人ひとりにとって新たな一歩となり、小児感染症学の未来を切り拓く契機となればこれ以上ない喜びである。

横浜の地で、皆様とお会いできることを、心より楽しみにしている。

第58回 The 58th Annual Meeting of
the Japanese Society for Pediatric Infectious Diseases

日本小児感染症学会
総会・学術集会

旧横浜検疫室
提供：横浜市長浜ホール

**横浜で変えよう、
自分と未来。**
~No Patience, No Fruit~

会期 2026年
10月24日(土)・25日(日) 会長 **森 雅亮**

会場 **パシフィコ横浜ノース**
〒220-0012 神奈川県横浜市長浜みなとみらい1丁目1-2

野口英世とゆかりある
聖米利加丸
提供：昭和館

東京科学大学
生涯免疫医療実装講座/
聖マリアンナ医科大学
リウマチ・膠原病・アレルギー内科

*

*

*